

弥生墓出土鏃の性格推定法

四分遺跡男女合葬墓出土の打製石鏃 四分遺跡は、飛鳥川右岸の藤原宮西方官衙南地区に所在する。当地区下層からは、弥生時代の竪穴住居や井戸、水田、方形周溝墓、環濠などの各種遺構と、銅鐸形土製品や小形仿製鏃の破片、絵画土器などの特殊遺物が出土している。集落は、前期後半に形成され、中期後半と後期後半の2度にわたって集落内構造の稠密化が頂点に達したのち、古墳時代初頭から徐々に廃絶の一途をたどり、醍醐遺跡や法花寺遺跡などの飛鳥川北東側へ集落が遷移していく(図72)¹⁾。

四分遺跡で特筆すべき事例の一つとして、青年期(20代)に相当する女性1体(第3号人骨)と男性1体(第4号人骨)が合葬された中期末の土壙墓SX8820が挙げられる。人骨は後世の攪乱を受けておらず、双方の頭位が互い違いに配置され、手足は緊縛されたまま埋葬されており、受傷痕も形成されていた²⁾。このうち、第3号人骨からは、右胸郭第9・第10肋骨間から有茎式打製石鏃1点が出土し(図73)、石鏃茎部には矢柄が付着していた痕跡として索条痕が認められたという³⁾。肋骨も完全な解剖学的位置関係を保っていたことから、この石鏃は、人体に嵌入していた可能性が高い⁴⁾と報告されている。

弥生墓から出土した鏃の概要 弥生時代の甕棺墓や木棺墓、土壙墓など(以下、弥生墓と称す)から鏃が出土することはよくあるが、人骨に嵌入していた事例は、そう多くないのが実状といえる(表9)。現状では、受傷痕のある人骨と鏃が共伴した事例や、剣戈などの鋒と鏃が共伴した事例が、人体に嵌入していた可能性が高いものと考えられる⁵⁾。さらに、上述した四分遺跡の事例を踏まえると、シャフトの装着された鏃が人骨内、あるいは被葬者の埋葬された範囲内から出土した事例も、人体に嵌入していた可能性が高いといえるだろう。今後、低湿地に立地する弥生墓から鏃が出土した場合は、鏃に付着した土ごと取り上げ、シャフトの痕跡を見出す作業が望まれる。

しかしながら、弥生墓から出土した鏃は、人骨の遺存していない棺内から出土する場合は圧倒的多数を占める。また、墓壙埋土から出土した小型の鏃や剥片の帰属など、判断に苦しむ事例も多い。

従来、鏃の性格は、法量と重量に着目して、狩猟用鏃と戦闘用鏃という二項対立的にとらえられる傾向にあったが、弥生墓出土の鏃については、人体への嵌入⁶⁾・副葬品⁷⁾・供献用具⁸⁾という3つの性格が指摘されてきた。**弥生墓出土鏃の性格推定法** その方法は、鏃の性格が推定できる資料を他の類例に敷衍するか、鏃の出土状況や型式学・機能論的観点から性格が推定されてきた。しかし、この区分は、各々の性格を抽象するための条件が部分的に整っている状態で、未解決の問題も内在する。近年では、鏃の性格を推定する新たな基準も提示されていることから、以下では、その進展状況と課題について、鏃の材質ごとに概観する。

石鏃は、投射実験と破損状況の観察から、刺突にともなう衝撃剥離痕や微細剥離痕が見出されており⁹⁾、破損状況という観点から人体への嵌入の有無を判断することが可能となりつつある。ただし、実験で使用されている石材が黒曜石である場合が多いため、弥生時代の事例に即した形で実験や観察をおこなう必要がある。ほかに、石鏃茎部に残る索条痕や石鏃のリサイクル痕跡¹⁰⁾、X線CTによる嵌入鏃の形態と入射角度の検討¹¹⁾といった視点も、性格を見極める上で有効な情報となりえる。

銅鏃は、弥生墓から出土した事例が少ないものの、甕棺墓の封土に銅鏃を含ませた事例(福岡県観音堂遺跡甕棺墓22)や、人骨に嵌入した事例(表9)など、性格のうかがえる資料が増加しており、従来から指摘されてきた実用性の中身¹²⁾があきらかになりつつある。近年では、人体に嵌入した青銅製武器には線状痕が形成される¹³⁾との指摘があることから、この点を実験によって確認し、実用性の中身を精査すべき段階にきている。

鉄鏃は、2点一組といった副葬規範が地域によって存在すると指摘¹⁴⁾されているが、人体へ嵌入していた鉄鏃の実態については判然としていない。この点に関する型式学的見解は、無茎三角形式Ⅱ類(身長5.5cm以上)などが対人用鏃の候補として挙げられている¹⁵⁾が、大型の鉄鏃は、人骨に嵌入すると折れ曲がること(三津永田遺跡32号人骨)。このような折れ曲がった鉄鏃や、矢柄の付着した事例、あるいは、人骨に嵌入した鉄鏃をX線CTによって形状を把握する、などといった新たな視点を付加することによって、鉄鏃の使用実態を検証していく必要がある。

表9 弥生時代における鉄の人体・人体嵌入の代表例

| 人骨嵌入例 | 人体嵌入例 | |
|---|--|---|
| 福岡県新町遺跡木棺24/朝鮮式磨鎌 福岡県塚崎東畑遺跡土塚墓1/凹基式打鎌、エイ棘鎌 熊本県沖ノ原遺跡第4トレンチ人骨8/打鎌 鳥取県青谷上寺地遺跡上腕骨30732/銅鎌 鳥取県青谷上寺地遺跡寛骨29152/銅鎌 鳥取県青谷上寺地遺跡寛骨31190/銅鎌 鳥取県青谷上寺地遺跡寛骨E-1/銅鎌 福岡県大庭宇土ノ上(狐塚西側)遺跡甕棺/鉄鎌 佐賀県三津永田遺跡甕棺32/凹基式鉄鎌 長崎県有喜具塚第3号人骨/柳葉式鉄鎌 | A. 受傷痕(創痕/骨折痕/剣戈などの鋒)のある人骨と鉄の共伴例 福岡県横隈塚遺跡甕棺45/凹基式磨鎌(骨折痕) 福岡県隈・西小田遺跡第10地点甕棺218/磨鎌5点(受傷痕/磨剣鋒嵌入) 福岡県高木遺跡土塚墓2/凹基式打鎌、凹基式磨鎌(磨剣鋒共伴) 佐賀県柚比梅坂遺跡C群甕棺1040/凹基式磨鎌(磨剣鋒共伴) 佐賀県高志社遺跡甕棺18/凹基式打鎌、凹基式磨鎌。 凹基式サメ歯鎌(銅剣鋒/磨剣鋒共伴) 熊本県八ノ坪遺跡土塚墓3003/平基式磨鎌(完形磨剣鋒嵌入) 山口県土井ヶ浜遺跡第2次調査人骨124/磨鎌1点、打鎌11点。 サメ歯鎌2点、鉄鎌嵌入痕跡(受傷痕) 奈良県四分遺跡土塚墓8820第3号人骨/有茎式打鎌(受傷痕有) | B. 人骨内・人骨と接した状態で鉄が出土した事例 鹿児島県広田遺跡北区土塚墓/平基式磨鎌 鹿児島県島ノ峯遺跡覆石墓人骨9/平基式磨鎌 大阪府亀井遺跡1号方形周溝墓主体部6/有茎式打鎌 大阪府亀井遺跡2号方形周溝墓主体部2/有茎式打鎌 大阪府山賀遺跡9号木棺墓/平基式打鎌、有茎式打鎌 兵庫県新方遺跡野手西方地区第1次調査区1号人骨/ 凹基式打鎌 兵庫県新方遺跡野手西方地区第1次調査区3号人骨/ 凹基式打鎌17点 長野県松原遺跡土塚墓11・凹基式打鎌 |

※1 人骨嵌入例は、人骨に嵌入している鉄。人体嵌入例は、骨には嵌入していないが、人体に嵌入していた可能性が高い事例。
 ※2 打鎌：打製石鎌、磨鎌：磨製石鎌、磨削：磨製石剣
 ※3 出土点数に記載のない事例は、いずれも1点。型式未確認の事例は、石鎌・銅鎌・鉄鎌と記載。
 ※4 各事例の出典は紙面の都合上、割愛。

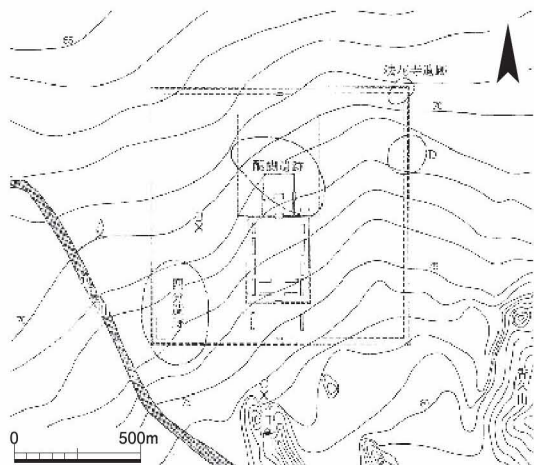


図72 藤原宮周辺地域の地形と弥生時代の遺跡 1:30000
(木下1980、アルファベットは弥生土器の採集地点)

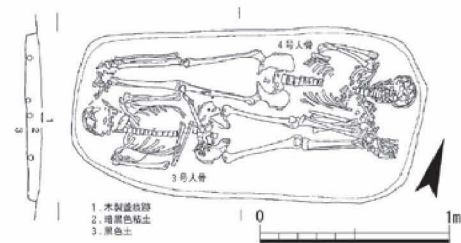
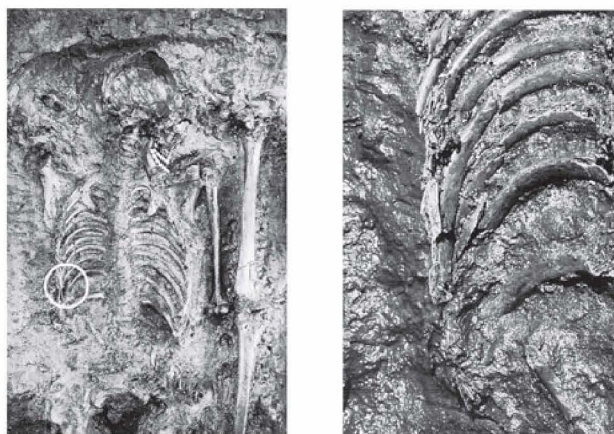
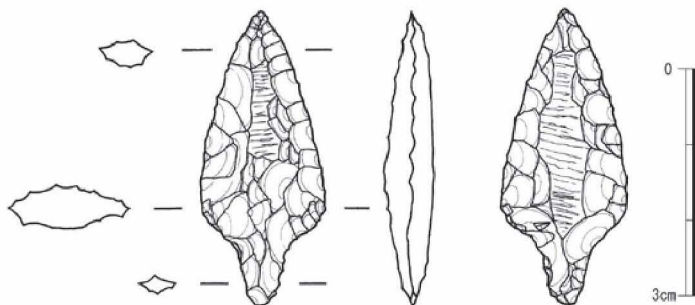


図73 四分遺跡男女合葬墓(SX8820)出土の打製石鎌 1:1(筆者実測)・出土状況 1:40(奈文研1998)・石鎌出土状況(縮尺不同)



これらの諸点を踏まえたうえで、弥生墓から出土した鉄のうち、人体に嵌入していた鉄の数量的多寡を抽象していく予定である。(荒田敬介)

註

- 1) 木下正史「考察」『藤原報告Ⅲ』1980、146～164頁。
- 2) 大藪由美子「奈良県四分遺跡出土の弥生時代人骨における傷痕の形態学的分析」『考古学研究』53-3、2006。
- 3) 深澤芳樹氏からの御教示。
- 4) 「西方官衙南地区の調査—第85次」『年報1998—Ⅱ』。
- 5) 橋口達也「弥生時代の戦い」『考古学研究』42-1、1995。荒田敬介「弥生墓から出土した鋒の性格—嵌入・副葬・供献—」『考古学雑誌』95-3、日本考古学会、2011など。
- 6) 橋口1995など。
- 7) 壺岐一哉「弥生時代鉄鎌副葬の展開とその特質」『古代学研究』167、古代学研究会、2004など。
- 8) 瀬戸谷皓「墳墓群の諸問題」『駄坂・舟隠遺跡群』豊岡市

文化財調査報告書22、1989など。

- 9) 御堂島正「石鎌と尖頭器の衝撃剥離」『古代』92、早稲田大学考古学会、1991など。
- 10) 三上徹也「縄文石器における「完形品」の概念について—石鎌を例とした考古学的史料批判の試論的实践—」『縄文時代』1、縄文時代文化研究会、1990。
- 11) 宮腰健司・山崎健・原田幹「朝日遺跡から出土した石鎌の刺さったシカ腰椎について」『研究紀要』12、愛知県埋蔵文化財センター、2011。
- 12) 高田浩司「弥生時代銅鎌の二つの性格とその特質—石鎌・鉄鎌との比較を通じて—」『考古学研究』47-4、考古学研究会、2001など。
- 13) 柳田康雄「青銅武器・武器型青銅祭器の使用痕」『橿原考古学研究所論集』15、八木書店、2008。
- 14) 壺岐2004。加藤徹「副葬品配置における左右の意味について—豊前地域の弥生時代後期を中心として—」『考古論集』河瀬正利先生退官記念論文集、2004など。
- 15) 大村直「石鎌・銅鎌・鉄鎌」『史館』17、1984。